

曲目解説

<交響曲第1番>

1800年4月に初演されたこの交響曲は、大体その前年、ベートーベン29歳の時に作曲されたものと考えられる。ベートーベンは22歳の暮れに、故郷ボンを立ってウィーンへ勉強のために出かけた。その勉強の成果の一つとしてこの交響曲が生まれたわけである。

ウィーン到着当時のベートーベンは、知る人もいない惨めな境遇であったが、まもなくウィーン一流のピアニストとして、広く人々の注目を浴びるようになった。さらに彼の大なる努力とその音楽の優れた特質は、次第に多くの人々の共感を得、作曲家としての地位をも確立するに至った。第1交響曲は正にこのような時期に書かれたのである。

1795年から1800年に至るまでの時期は、ベートーベンにとって、ハイドンやモーツァルトの模倣時代と言われるが、すでに、旋律、リズム、またその和声において個性的なひらめきをもよく示している。この第1交響曲においても、根本的な骨格は古典的であるとは言え、主題展開の技巧、和声の扱い等、後年のベートーベンを思わせるものを十分に示している。

<ダッタン人の踊り>

作曲者ボロディンは1834年11月12日ペトログラードに生まれ、1887年2月27日に亡くなっている。父は昔コーカサスで栄えたイメレティア王家の後裔のゲデオノフ公であるが、庶子であったため、使用人ポルフィリ・ボロディンの子として届出された。少年時代から音楽と科学に天分を示し、ペトログラードの軍医学校卒業後、23歳で母校の助教授となった。1858年には薬学博士の称号を受け、学者であると同時にロシア国民楽派（5人組）の一人として、二重職業の華々しい生活を送った。

歌劇「イーゴリ公」は、1880年頃から作曲が始められたが、その完成を見ないまま、ボロディンは永眠してしまった。彼の死後、リムスキー・コルサコフとグラズノフによって補作完成され、1890年10月23日、ペトログラードにおいて初演されている。

「ダッタン人の踊り」は、その第2幕、ダッタン軍の陣営の場で、捕らわれの身となっているイーゴリ公を、敵将コンチャク・カンが慰めようとして盛大な歌舞の宴を開く場面で演奏されるものである。

<管弦楽組曲第2番>

チャイコフスキーは、オーケストラのための組曲を4曲作曲しているが、それらは、第4交響曲と第5交響曲の間に書かれている。ここでは、交響曲よりも時代を遡るバロック時代の形式を回顧することで、新しいアイデアを探ろうとした跡が見える。同時に交響曲という定型から離れた自由な発想も表れている。

1883年6月後半から、チャイコフスキーは楽旅と創作の疲れを癒すために、モスクワ郊外ポドゥシキノの弟アナトーリの別荘に滞在していた。しかし、すぐに退屈を感じて創作意欲が湧いてきた。その結果生まれたのが、この組曲第2番だった。チャイコフスキー自身は「性格的組曲」と呼び、滞在中面倒を見てくれたアナトーリの妻プラスコーヴィアに献呈した。

曲は、ラプソディックな第1楽章、優雅で爽やかな第2楽章、はつらつとした第3楽章、柔らかく甘美な第4楽章、明るい舞曲の第5楽章から成っている。初演は1884年2月16日にモスクワで行われた。なお、第3楽章に用いられているアコーディオンは、民族楽器のバヤンを想定していたと言われている。